

演劇という分野を主な仕事場に選んだので、さほど、金の苦勞をした記憶がない。経済的に豊かなのではなく、お金がないならないでなんとかしようと智慧と諦めが身についているのである。

舞台装置を作る金がいなければ素舞台と呼ばれる何もない空間でなんとかするし、衣装代がなければ役者の私服でもできる。照明はちよつとは必要だけど、どうしてもないなら蛍光灯でもやれないことはない。音楽だって、カセットデッキを誰かから借りればなんとなる。劇場だって、公民館とか区民ホールを安く利用するという方法やカフェの片隅を借りるという方法もある。どうしても小屋が借りられなければ、屋外でやればいい。

演劇は、たぶん、生き残っている表現方法の中で、絵画と同じぐらい古いメディアなので、貧乏とか貧窮とかに強い。あんまり自慢できることではないが、とにかく、貧しさに強い。

映画はこうはいかない。どんなに貧乏でもカメラを借りなければいけない。さらに上映のための設備が必要となる。もちろん、ドキュメンタリー作家さんなんかで、家庭用のカメラでうんと格安に創っている人もいるけれど、それでも、演劇に比べてお金がかかる。テレ



絵・江口修平

## 演劇とお金

鴻上尚史

ビは言わずもがなである。

で、そういう貧乏と仲のよい演劇なのに、ミュージカルなんざになるとチケット代が軽く一万円を超す。僕はミュージカルが大好きで、何作か創ったことがあるのだけれど、この価格のために、「ミュージカルをまたお願いします」と言われると、つい二の足を踏んでしまう。

僕は、大学のサークルから演劇を始めた。そこで劇団を創って、最初のチケット代はたしか七百元とか八百円だったと思う。同世代の人間達が簡単に見に来れる敷居の低いメディアだった。それが、気がつくと五千円を超すようになった。

そして、ミュージカルになると一万円を超す。正直に言えば、自分が一回一万円を超す作品を創っているというのは、異常だと思っている。それは、ある特定の人向けの限定された世界の出来事ではないのかと考え込んでしまう。自分の創るものが開かれることなく閉じてしまうことに危惧と不安を感じる。

と、書きながら、ふと、「プロードウェイに行くと自分も平気で一万円のミュージカルを見るんだよなあ」と思う。同時に、それだけの金額を貰わないと成立しない演劇というメディアはなんだろうと疑問にも思うのだ。



こうかみ・しょうじ●作家・演出家。愛媛県出身。早稲田大学法学部卒業。1981年に劇団「第三舞台」を結成し、作・演出を手がける。舞台公演のかたわら、エッセイスト、ラジオ・パーソナリティ、テレビの司会、映画監督など幅広く活動。現在はプロデュースユニットKOKAMI@networkと若手の役者を集めて旗揚げした自身主宰の劇団「虚構の劇団」での作・演出が活動の中心。2010年に第61回読売文化賞戯曲・シナリオ賞受賞。